

## 11、低音弦を押える。(その-2)

※このテキストで設定した「荒城の月」の調子は、一般的チューニングのギターにとって都合の良い調子です。それは、使われている和音のベース音が低音4?6弦にあるからです。  
ところが実際に色々な調子の曲を弾こうとすると、低音弦を解放のまま使えることはそれほど多くはありません。

また、あるフレーズを低音に移してひくことによって、印象深い演奏になることがあります。少々手がかれますが、低音弦も楽に押さえられることを目指して練習して下さい。

譜例-35

⑤ ----- | ④ ----- |

p ----- |

●譜例-35は「荒城の月」後半のはじめ4小節のメロディーを1オクターブ低くしたものです。1小節目が5弦、あとの3小節は4弦だけでひくことになり一見楽そうなのですが、弦を押さえるのに使う指が2（中指）と3（薬指）で、なかなかフレットの間隔で開くことができず疲れます。

そこで、指を使い慣れる目的で譜例-36-a,bを練習しましょう。

譜例-36-a

④ ----- |

p ----- |

譜例-36-b

⑤ ----- |

p ----- |

\* 譜例-36-a,bとも5回くり返せる頑張り (!) を発揮できる人は少ないと思います。

ところが、アクセント記号の音を「ほんの少し強くひく」ようにすると、あ〜ら不思議、5回くらいの回数は問題なくくり返すことができるようになります。

これは「音のグループ」が1小節単位に感ずるか、2小節単位に感ずるかの違いであり、「リズム」の持っている不思議で、リズムカルな動きは運動機能を高めます。

4拍子は「強-弱-中強-弱」という強さ（重さ）の異なる拍が交互にくり返される拍子ですが、毎小節同じに感じていると、強弱を付けないで弾いたときと同じに4小節が長く感じてしまいます。

また、2,4小節に実践の括弧で示した2音に、他の所よりひきづらさを感じる人がいると思います。そこ（3拍目）にアクセントを付けると余計にひきづらくなります。無意識で強くならないようにしましょう。

●同じ要領で6弦でも練習しておきましょう。

譜例-36-c

⑥ ----- |

p ----- |